

PISA型読解力を育むテキストとは

—メタファーを中心としたテキストの調査—

川崎市立橋高等学校
平 典 人

I 主題設定の理由

2000年のPISA調査の結果から「読解力」に対する多くの論文や見解が発表されてきた。その中で有元秀文の仮説*1は「もともと日本の高校生は、国際的な読解力は不得手だったのではないかと述べている。PISA調査が指摘した読解力*2は、今までの読解力とは違う、国際的な「読解力」と言っているものなのだろう。読解力の充実を考える時、PISA調査が読解力として求めているものの質を教員は理解する必要があるのではないだろうか。

神奈川県高校教科研究会国語部会でも、2005年度から『読解力を育む学習活動の展開』*3として、研究発表がなされてきたのも、読解力の向上が校種を問わず、高校教育にも問われているとの考えからだろう。しかし、PISA調査が15歳を対象としていたためなのか、小・中学校に比べ高等学校でのPISA調査に対する認識が私を含め薄いように思われる。

しかし、神奈川県高校教科研究会国語部会の2007年2月14日の発表の中では、「PISA型読解力をつけていくには、従来の『文章を読んでその意味を理解し、解釈する力』が当然必要となってくる。この2つの読解力はリンクしており、従来の読解力の解釈をさらに拡大し、書く活動と関連させ、自分の意見を社会に発信し、表明する能力を育成するべき」としている。果たして、従来の読解力をさらに育成するだけでPISA型読解力がつくのだろうか。

そこで、先行研究があまりなされていない、「読解力」を中心にPISA調査が炙り出した問題点に対応するためのテキスト調査を本研究の対象とした。

II 研究の内容

1 PISA問題「贈り物」問7について

(1) 問題の概要

PISA調査とは、経済開発協力機構(OECD)が世界41カ国(2003年調査)の15歳の子どもたちに実施した国際的な学習到達度調査の略称で、正式名称は「生徒の国際学習到達度調査」(Program for International Student Assessment)である。2000年から2003年2006年そして本年2009年と継続的調査が行われている。そのため、問題の全容がすぐに公表されないため、隔靴搔痒の感が否めないが、読解力調査が中心だった2000年の問題「贈り物」の問7を中心にPISA調査を考察してみた。特にPISAの「贈り物」の問7は質問内容の特異性と、また日本の無答率の高さから話題になった。

*1 有元秀文「PISA調査で、なぜ日本の高校生の読解力は低いのか?」『日本語学』(2005年6月号)

*2 PISA調査での読解力とは「自らの目標を達成し、自ら知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力である。」と定義されている。

*3 『かながわ高校国語の研究』第43集(2007年12月1日発行)神奈川県高等学校教科研究会国語部会

下記の表は、PISA2000の日本と本校の1・3年生各1クラス*4との比較である。検査対象数から正確な比較はできないが、問7に関する問題点を書き出してみた。

表1 贈り物に関する問7の結果

プロセス 熟考と評価 論述形式 (単位：%)

| 調査対象 | 反 応 率 | | | | | 正答率 |
|--------|-------|--------|--------|------|------|------|
| | 完全正答 | 部分正答2点 | 部分正答1点 | 誤答 | 無答 | 全体 |
| 日 本 | 12.0 | 13.4 | 17.6 | 16.3 | 40.7 | 34.2 |
| アメリカ | 27.0 | 4.2 | 28.3 | 32.5 | 8.0 | 45.3 |
| OECD平均 | 20.5 | 4.5 | 24.3 | 30.0 | 20.8 | 37.1 |
| 本校 1年 | 7.5 | 10.0 | 30.0 | 22.5 | 30.8 | 32.5 |
| 本校 3年 | 27.7 | 33.3 | 5.5 | 16.6 | 16.6 | 63.7 |

注 正答率は完全正答した生徒の割合に部分正答の生徒の割合を0.5倍して加えたものである。

2000年のPISA調査は読解力が中心で37ユニット141問題(大問37、小問141)が出題されている。調査の概要(時間など)が発表されていないので安易に判断できないが、問題文の長さは日本の子ども達の解答にも影響していると思われる。

また、「贈り物」の問7の問題は『ポーチの上には、かじられたハムが白い骨になって残っていた。』の部分が設問になっている。テスト問題の語注がどうなっているかも、確認できなかった。そのため、ハムについては、問題文中に「天井に吊るされたスモークハム」の言葉があるだけで、生活習慣の違いから、骨のついているハムを知らず、問題文の意図を理解できていない解答も見られた。

(2) 問題の意図

PISA型読解力は、プロセスを三つのタイプに分けている。「情報の取り出し」「解釈」「熟考と評価」である。『贈り物』では、問1と問7が「熟考と評価」にあたる。「熟考と評価」については「テキストに書かれていることを知識や考え方・経験と結びつけること」と定義している。PISA型読解力は、「テキスト内部の情報を利用」することと「外部の知識を引き出す」ことに大別していることから、「外部の知識を引き出す」ことが「熟考と評価」にあたるのであろう。

PISAは問7の完全正答をレベル5に位置付けている。レベル5とは「テキストの特定の部分が暗示的主题や意図に対して持っている関係性を見分けるために、論述構造が明確または明白に特徴づけられていないテキストをうまく処理することができる。」としている。つまり、「贈り物」では次のようになるだろう。

- 1 テキストの暗示的主题や意図を読み取る
- 2 物語の中心の関係と最後の一文との関係を読み取る

になるだろう。採点基準からも、最後の一文を、「物語の中心の関係、問題、または、比喩」と結びつけることが求められており、ここに出題の意図があるのだろう。

(3) 考察

「贈り物」の問7を正解していくためには、長文のテキストを理解し、物語の結末の適切さについて、批判的に評価する力*5が求められている。また、テキストを理解するとは、表面的なものな

*4 1年40名(10月2日実施) 3年17名(9月22日実施)

く、抽象的な理解まで求められていると言える。

正答基準には、積極的な評価でも否定的な評価でも、両方に適用できるとしている。しかし、本校で試行した調査結果の中には、白い骨の象徴性・暗喩の意味が理解されていない解答があった。

ヒョウと女性の関係は「敵対」から「共感・親和」に変化している。これがこのテキストの基本的な構造であり、そこから主題が想定される。しかし、「批判の道具」としての、メタファーの知識がなく、多くの無答を生んでいったと推測できた。

この対策として、文部科学省（2006）*6でも、「改善の具体的な方向」として三点が示されているが、その1番目として「①テキストを理解・評価しながら読む力を高めること」が挙げられている。この読む力を高める方法を、香川大学の山本茂喜*7が読みの過程を整理して

- ① 中心人物の問題、中心人物と登場人物の関係、語り手の目的、態度などを読み取る。
- ② ①をもとに、テキストの暗示的主题や意図を読み取る。
- ③ メタファーなど、テキストの特定の部分と主题の関係性を読み取る。
- ④ その効果について内容と形式の両面において、批判的に評価する。

とし、現在のわが国の文学教材の読みに欠けている「読解力」は、第一にテキスト構造に関する知識、そして次に、それに基づいた主题の仮定、メタファーやトーンなどのレトリックを、主题に結び付けて評価することと述べている。

2 現行教科書の調査

「国語教科書の思想」で石原千秋*8は、読解力の低下を論じる中で、定番教科書にある、見えないイデオロギー教育が読解力低下につながっていると論じている。イデオロギー教育とは広い意味での道徳教育だと、次のように主張している。

『羅生門』では、生きるために強盗になろうとする青年（下人を解雇された青年）が、強盗しようかどうか迷う心の葛藤の中心に「エゴイズム」の問題がある。『山月記』では自分の詩作のためには家族をも顧みないような「エゴイズム」が、主人公を虎の姿に変えてしまったということになりそうだ。『こころ』は、改めて言うまでもなく、友情と恋愛とを天秤に掛けて、恋愛を取った〈先生〉の「エゴイズム」が問題とされる。『舞姫』もある意味では同様で立身出世と恋愛とを天秤に掛けた主人公が立身出世を取った「エゴイズム」が、「近代的自我」の未熟さを証明している。

以上のように、石原千秋はその著書で「戦後の学校空間で行われる国語教育は詰まるところ道徳教育なのである。」と主張している。定番教材としてあげた「羅生門」「山月記」「こころ」「舞姫」全てが、「エゴイズムはいけません」という道徳的メッセージを教えることができ、定番教材の定番教材たるゆえんだとしている。

事実、「定番教科書」について、阿武泉は「高等学校国語教科書における文学教材の傾向」*9に詳しく論じている。象徴的なことは、2007年度から高校1年生が学ぶ必修科目「国語総合」のすべての教

*5 クリテリウム・ディング/資料集 p24 川崎市教育委員会『学習指導の工夫と改善に向けての資料V』2008年

*6 『読解力向上に関する指導資料』（PISA調査の結果分析と改善の方向）2006年4月文部科学省

*7 香川大学教育学部研究報告第1部2007、第128号 山本茂喜「物語文におけるPISA型『読解力』とは」p1

*8 石原千秋 『国語教科書の思想』p27 ちくま563 ちくま書房

*9 『国文学』2008年第53巻13号 阿武 泉「高等学校国語科教科書における文学教材の研究」

科書に芥川龍之介の「羅生門」が掲載されていることだ。他にも、2年生用教科書では、中島敦の「山月記」が8割以上。夏目漱石の「こころ」が7割以上に掲載。3年生用では、森鷗外の「舞姫」の採録が圧倒的に多いと発表している。

阿武は「現代国語」から「国語Ⅰ・国語Ⅱ」と変わった昭和57年から、ちょうど夏目漱石の「こころ」が採用1位となったところから、採用作品の固定化が始まったとしている。しかし、その一面、山田詠美・吉本ばなな（現よしもとばなな）の登場もこれ以降である。

表2は阿武の調査、昭和28年から現在までに使用された教科書の上位10名の作家リストである。

| 作家 | 採録数 | 採録作品 |
|-------|-----|---|
| 夏目漱石 | 347 | こころ 183 三四郎 55 それから 30 草枕 27 夢十夜 27ほか |
| 芥川龍之介 | 310 | 羅生門 176 鼻 43 舞踏会 19 枯野抄 17 戯作三昧 11ほか |
| 森鷗外 | 300 | 舞姫 153 高瀬舟 41 寒山拾得 33 安井夫人 25ほか |
| 志賀直哉 | 241 | 城の崎まで 75 赤西蠣太 28 暗夜行路 23 清兵衛と瓢箪 17ほか |
| 中島敦 | 229 | 山月記 201 名人伝 12 李陵 5 悟浄歎異 3 牛人 3 弟子 3ほか |
| 太宰治 | 175 | 富嶽百景 61 津軽 24 走れメロス 11 清貧譚 12 葉桜と魔笛 9ほか |
| 井伏鱒二 | 125 | 山椒魚 45 屋根の上のサワン 32 黒い雨 27 乗合自動車 4ほか |
| 安部公房 | 103 | 赤い繭 40 棒 18 鞆 16 空飛ぶ男 9 公然の秘密 4ほか |
| 梶井基次郎 | 100 | 檸檬 52 闇の絵巻 14 城のある町にて 13 路上 7ほか |
| 川端康成 | 94 | 伊豆の踊り子 42 バッタと鈴虫 18 雨傘 8 古都 6ほか |

3 テキストの選定

小説も現代文である以上、時代に見合った文章、現代の息づかいを感じさせる文章を生徒達に読ませたい。また、調査の中で、現行教科書が男性作家に偏っていることも見逃せなかった。今回の調査対象は以下のとおりにした。

現行教科書から、作家を限定した。

村上春樹 よしもとばなな 干刈あがた 山本文緒

この中から、メタファーなど、テキストの特定の部分と主題の関係性を読み取れる作品を検討した。山根由美恵*10によると、村上文学には、寓話的設定が多く、設定のみならずその方法にも寓話性が深くかかわっているとの指摘もあり、村上春樹の「パン屋再襲撃」で検証授業を行うことにした。

4 検証授業

- 対象 普通科3年生（男子5名 女子14名 計19名）国語表現選択者
- 課題 村上春樹著「パン屋再襲撃」で使われた比喩から主題を考える
- 目標 課題に即応した読む能力の育成
- 日時 2008年10月27日から
- 身につけたい力

連続テキストを取り上げることで、その中に表現された比喩に着目し、作者の表現意図を読み解き、解釈する力を身につける。

- 主たる評価基準

*10 山根由美恵 村上春樹 Study books 7 p71 2007年 若草書房

〈呪い〉を解くべきだと主張する妻とともに、パン屋を再襲撃に向かう時、主人公が抱く海底火山のイメージの意味を理解している。

○ 指導のねらい

連続テキストを読むとき、ストーリーを中心とした読みの授業を展開することが多い。そうした読みではテキストを分析・批評する力はなかなか養われない。そこで、表現された比喩を手掛かりに、主題を考えていく。

○ 使用するテキスト

村上春樹「パン屋再襲撃」1986年 文芸春秋発行

○ 授業の実際〈4時間扱い〉

- 1 テキスト全体を読み、内容を正確につかませること。ワークシートを用いて比喩表現に着目させる。
- 2 調べ出した比喩表現の中から、主題にかかわる比喩を話し合わせる。
- 3 テーマにつながる比喩を中心に自分の考えをまとめさせる。
- 4 前の時間にまとめられた他者の意見を、主題との関係で評価させる。

○ まとめ

1 テキストの選択について

- ・事前の聞き取りでは、村上春樹を読んでいた生徒が4名いた。「海辺のカフカ」4名、「羊をめぐる冒険」2名、「ノルウェイの森」1名（いずれも女子。重複回答あり）しかし、時代に見合った作品を選んだつもりであったが、作品に描かれた1980年も生徒達には解説が必要だった。
- ・日頃利用しているマクドナルドなどが舞台になっていることもあり、生徒の多くは作者への関心も示していた。

2 授業の展開について

- ・1時間目のワークシート（資料編参照）では、直喩のみを書き出す生徒がいた。「マクドナルドがアメリカ文化を表している。」の指示が必要だった。比喩についての理解は、生徒間に大きな差があった。
- ・2時間目の話し合い活動では、表題の再襲撃という言葉から『呪い』を取り上げる意見が多かった。「海底火山」だけでなく、生徒の中には『間違っただけ』が主題にも結びついていると主張し、授業テーマとしての比喩が一つに絞れなかった。
- ・3時間目にまとめてもらった生徒Eの意見・生徒Aの意見（資料編参照）

この二人の意見を読むと、テキストについて自分の考えを、時にテキストで用いられた比喩をも巧みに使いながら書かれている。海底火山という比喩から主題にも迫っている。しかしPISA型読解力の要求は、その奥に示された意図を理解し熟考することである。この熟考は「既有知識の活用」*11 することである。生徒Eの「何か大きなもの」、生徒Aの「満たされない何かを象徴する不吉な影」とは自分自身にとって何を意味するのかを問う授業展開が必要であった。

Ⅲ 今後の課題

*11 横浜国立大学付属横浜小学校『「読解力」とはなにかPartⅢ』 p14 三省堂 2008年

渡辺雅子の「納得の構造」(日米初等教育に見る思考表現のスタイル) *12の中に、「アメリカの調査3校の国語の授業(language arts)で最も重要視されているのが、作文(writing)能力の向上である。

(中略) アメリカの国語の授業が目指すのは、様々な文章の目的とその書き方を教えて、それらを状況に応じて書き分けられるようになることだった。調査校で使っていた国語の教科書では5年生で12種類の文章様式—物語・詩・手紙(ビジネスレターと親密な手紙)・説明文・説得文・写真エッセイ・レポート・インタビュー・広告・本の紹介・自伝・戯曲—が紹介されており、1年生の教科書でもほぼ同じ種類の様式の説明が掲載されている。」という指摘がある。

この12種類の文章様式とPISAの問題が符号していると思うのは私だけだろうか。例えば、戯曲では「アマダと公爵夫人」に関する問題がそれにあたり、手紙・説明文では「落書き」に関する問題である。

日本では作文を書かせる時、「何でも自由に思ったことを書いていい」という言葉から始まる。そして、その作文で是とされるのは、「生き生きとした気持ちの表現があるもの」である。比喩はより豊かに表現する技法として生徒に説明される。しかし、渡辺雅子によると、アメリカの作文指導では、使用する比喩が目的に応じた文章(主題)と合致しているかが問題とされる。

「贈り物」の問7の問題は、「最後の文(ポーチの上には、かじられたハムが白い骨になって残っていただけだった。)が、このような文で終わるのは適切だと思いますか。」であった。比喩・象徴もその目的・主題との関係を、常に問われているアメリカの生徒の無答率は8%であり、日本の無答率が40.7%あった理由が作文指導の違いからも推測できる。

今後の対策として単にテキストについて、自分の考えを述べさせるだけでなく、テキストにおける作者(発信者)の目的・意図を推論し、それに基づいて批評する力を養うべきである。

連続テキストの場合、生徒一人一人が自らの有する知識と経験に結び付けて考えられる要素が多い。そのため連続テキストは今後も重要視されるだろう。特に、村上作品は、「村上が考える『物語』とはテキストの主題を別の形に変換させて生まれた《寓意性》であり、そこに〈内的体験の現実性〉が備わったもの。また、テキストの持つ《寓意性》が国境という枠を越えている。」という山根由美恵の指摘が正しければ、テキストとして多く採用されるだろう。

比喩の問題では、言語は現実の事実との関係(直示)、心的イメージとの関係(表象)、表示されたものとの関係(意味作用)を含んでいる。「贈り物」の問7の「白い骨」を事実としてだけでなく、登場人物の心象、主題との関係で把握できるようにする必要がある。比喩を表現方法としてだけで捉えるのではなく、仮定した主題に結び付けて熟考・評価をすることを繰り返さなければならないだろう。

現在の高校生が、PISA型読解力が不足していたとしても、読解力そのものが低いわけではない。2ページの間7の結果比較の正答率が1年から3年で大きく伸びていることからそれは判断できる。しかしまだ、アメリカの2倍近くの無答があることが今後の課題だろう。

【参考文献】

新・岩波講座哲学3『記号 論理 メタファー』

1986年

*12 渡辺雅子『納得の構造』(日米初等教育に見る思考表現のスタイル) 東洋館出版社 2004年 他

【指導助言者】

川崎市総合教育センター指導主事 新垣英一

川崎市総合教育センター指導主事 荒井利之